

## 総論

## 宿題からの解放を求めて

丸山 啓史

京都教育大学准教授

## 宿題という重荷

私が宿題に強い関心を向けるようになったのは、障害のある子どもの実情に触れたからです。宿題に苦しんでいる子どもたちがいました。小学生が放課後に一時間、二時間かけて宿題をしていたのです。宿題をするだけで夜を迎えてしまいます。付き添う母親も大変そうでした。

障害がなくても、「勉強が苦手な子ども」とっては、宿題が大きな重荷になります。遊んだりゴロゴロしたりする時間が減ります。親や先生にあれこれ言われます。気持ちが暗くなります。できていない宿題を休み時間にさせられると、学校生活の楽しみが奪われかねません。宿題は、子どもの不登校のきっかけにもなっています。<sup>(注二)</sup>

親の苦勞も無視できません。忙しいなか、子どもの宿題に付き合わなければなりません。「いつ宿題やるの!？」といったことから、親子喧嘩が勃発します。子どもの宿題への対応をめぐって夫婦喧嘩が巻き起こることもあります。親による「丸つけ」や「チェック

ク」が求められる場合があるのも厄介です。「なおし」を迫られた子どもは不機嫌になり、親子の緊張が高まります。

学校の先生も、宿題の存在に困らされているのかもしれないかもしれません。「宿題を忘れたの？」から始まる朝は、先生にとっても不本意なものでしょう。先生は、宿題の用意や確認にも時間をとられます。一方で、宿題を減らしたいと思っても、隣のクラスとの足並みが気になったりします。宿題についての保護者の意識もさまざまで、「減らしてほしい」「なくしてほしい」という意見もあれば、「しっかり宿題を出してほしい」という声もあります。

小学生の宿題は、学童保育にも歪みをもたらしています。ただでさえ放課後の時間が短いのに、宿題をしていると仲間と遊ぶ時間がなくなってしまうのです。けれども、「学童保育で宿題を終わらせてほしい」という親の思いも道理のあるものですし、家に帰ってから宿題をするのは子ども自身にとっても負担だったりします。宿題のせいで、学童保育は板ばさみの状態に置かれています。

中学生の「宿題」「課題」「提出物」「小テスト」も

悩ましいものです。教科ごとに（無秩序に）課題が与えられると、負担が過重になることもありますし、やりくりが不得意な子どもはパニックに陥ってしまいます。

## 長時間労働の子どもたち

NHK放送文化研究所が二〇二〇年に実施した国民生活時間調査によると、小学生の「学校外の学習」は、平日一日あたり一時間一六分です。六時間五九分の「授業・学内の活動」と合わせると、「授業」が八時間一五分に及びます。しかも、「授業」のなかに「習いごと」は含まれていません。中学生の「授業」は九時間五二分、高校生の「授業」は九時間三三分です。

英語では、学校の授業等が「schoolwork」と呼ばれることがあります。家でする宿題は「homework」です。学校での「schoolwork」と家庭等での「homework」を合わせると、日本の子どもの多くは一日に八時間を超える「work（仕事）」をしているのかもしれない。国民生活時

間調査で示されているのは「平均」ですし、土曜日や日曜日に「学業」をする子どもも多いはずなので、一週間の「仕事」が四〇時間を大きく上回る子どもは少なくないと考えられます。

ところが、子どもの「仕事」については、労働基準法のようなものがありません。宿題を一日に〇分以上させてはいけない」とか、「小学生を〇時以降に学習塾にいさせてはいけない」とか、「夜遅くにオンラインで勉強させてはいけない」とか、そういうルールが確立されていません。

子どもたちの「仕事」がふくらむのを野放しにしてよいのでしょうか。どうにかして「仕事」に歯止めをかけるべきだと思います。

そもそも、宿題は必要なのでしょうか。「学力のために必要」という意見は多そうですが、どういう宿題にどういう効果があるのか、科学的根拠は曖昧です。また、漢字練習や計算練習が求められるのだとしても、それを学校でははならない理由、宿題というかたちでしなければならぬ理由は謎です。

「宿題が家庭学習の習慣を育む」という説も根強いのですが、それが本当かどうか怪しいですし、だ

いたい、どうして子どもたちは「家庭学習の習慣」を期待されるのでしょうか。働く大人は、少なくとも建前としては、「持ち帰り仕事の習慣」を求められないはずで、それなのに、子どもは家で「仕事」に励むべきなのでしょうか。

## 不平等な宿題

宿題は、不平等なものでもあります。

まず、宿題は家庭環境の影響を受けやすいものです。親が子どもの宿題を手伝いやすい家庭もあれば、そうでない家庭もあります。きょうだいの世話をしないといけない子どもは、宿題のための時間をとりにくいかもしれません。静かな部屋で勉強机に向かえる子どももいれば、幼い弟や妹が騒がしく遊んでいる隣で宿題をする子どももいます。

小学生の夏休みの宿題は、親の協力が前提になっている場合が多いようです。自由研究や工作は、「親の宿題」のようになっていたりします。親の手が加わった絵画や作文が入賞したという話も珍しくありません。けれども、時間と力量に恵まれた親をもつ

子どもばかりではないのです。

次に、宿題は「勉強が苦手な子ども」に特に厳しい、という問題もあります。クラス全員に同じ宿題が出された場合、「勉強が得意な子ども」は難なく宿題をこなしたとしても、「勉強が苦手な子ども」は長い時間を宿題に費やさなければなりません。宿題が苦手な子どもほど、宿題と長く付き合うことになるのです。

しかも、「勉強が苦手な子ども」にとって、宿題は単なる苦行になりかねません。本人に合った宿題は子どもの学びにつながるかもしれませんが、たとえば分数の足し算の仕組みが理解できていなければ、たくさんの計算練習を押しつけられても意味がなさそうです。ほかの子どもには多少なりとも意味のある宿題が、一部の子どものには意味がないのだとすると、やはり不平等な気がします。

## 「タブレット宿題」をどう考える？

宿題を一人ひとりの子どもに合わせることを考える際、最近では、「ICTを活用すればよいのでは」

という意見が出されます。たしかに、「一人一台端末」という政策のもとで、タブレット等を使う宿題が増えてきています。機械の使い方によっては、子どもたちがそれぞれ異なった宿題に取り組むという方式も可能です。

ただ、子どもごとに宿題がさまざまなのだとしたら、その宿題の目的は何でしょうか。「国語の教科書に新しく出てきた漢字を覚える」といった全員共通の宿題とは趣旨が違っているかもしれません。宿題が「自分の力に合わせて勉強してきてください」というものなのだとしたら、その宿題は本当に必要なのでしょうか。

タブレットの使用については、子どもの視力への影響も懸念されています。機械の損傷などをめぐるトラブルも心配です。タブレットを家に持ち帰ると、ただでさえ重いランドセルがさらに重くなってしまいます。

さらに言えば、宿題だけの問題ではないのですが、タブレットの活用による環境負荷の増大も気になります。ICTを支えるデータセンターでは、大量の水やエネルギーが消費されています。<sup>(注)</sup>電子機器に用

いられる鉾物の裏には、人権侵害や環境破壊があつたりもします。スマホやタブレットの向こう側では、学校に行けない子どもたちが重労働・暴力・環境汚染・貧困に苦しめられ、命を奪われているのです。「ICTを活用すれば個別最適な学びが進められる」などと、気軽に言っつてほしくありません。

## 宿題問題の根は深い

私は、学校の宿題をなくしていくべきだと考えています。学校のもとで学校教育が完結する状態を基本形にしなければならぬと思います。

日本では、一九六〇年代に、宿題をなくす小学校が広がりました。近年も、宿題をやめる学校が出てきています。外国に目を向けても、宿題に依存しない学校教育のあり方を見つけることができます。そのような例にも学びながら、宿題をなくしていく道筋を探りたいものです。

けれども、「今すぐ宿題をなくせば、すべてうまくいく」と言うつもりはありません。

第一に、学校の宿題が減ったからといって、それ

だけで自動的に子どもたちの生活が豊かになるわけではありません。学童保育を充実させること、子どもが無料で参加できる文化的活動の場を増やすこと、自動車の往来を制限して子どもに道路を返すこと、自由に出入りできる居場所・活動場所を子どもたちに保障することなど、社会的な環境の整備が求められます。

第二に、学校の宿題が少なくなったとしても、そのぶん学習塾などの時間が拡大することになれば、子どもたちの「長時間労働」は続きます。子どもの学力向上に熱心な家庭、お金に余裕のある家庭だけが学習塾などの時間を増やすなら、子どもたちの学力格差は広がるかもしれません。子どもたちが勉強に追い立てられる仕組みが解消されなければ、仮に学校から宿題がなくなつたとしても、問題は残り続けます。十分な学習が昼間に学校で保障されるようにならないと、「学業」が学校の外にあふれます。

## 実情を共有したい

宿題からの解放は、なかなか難しい課題です。

さしあたりは、子どもたちの重荷を少しでも軽くすることが求められます。宿題に苦労している子どもについては、本人や保護者と教師が相談することで、個別に宿題の量や内容を調整するといった方策を考えてみるができます。また、宿題の「丸つけ」を厳しくせずに「なおし」を減らす、宿題のために休み時間を奪わない、可能な範囲で教師が宿題の援助をする、減らせる宿題がないか見直してみるといったことも大切かもしれません。

そうした対処を進めながら、宿題をめぐる実情を関係者で共有していきましょう。夜遅くに家で泣きながら宿題をする子どもの姿は、学校の先生には見えにくいものです。学童保育などで宿題をする子どももいますし、宿題をめぐる状況を保護者が十分に把握できているとも限りません。実情の共有は、宿題改革の出発点になります。

宿題からの解放に向けて、できることを模索したいと思います。

注一 子どもの発達科学研究所「子どものこころの発達研究センター」「文部科学省委託事業 不登校の要因分析に関する調査研究報告書」二〇二四年

特集2 ●宿題は、ホントに必要な？



注二 橋本淳司『水の戦争』文春新書、二〇二五年  
注三 シッダルト・カラ『ブラッド・コバルト』コンゴ人の血がスマートフォンに変わるまで』夏目大訳、大和書房、二〇二五年  
注四 丸山啓史『宿題からの解放―子どもも親も学校も、そして社会も』かもがわ出版、二〇二三年